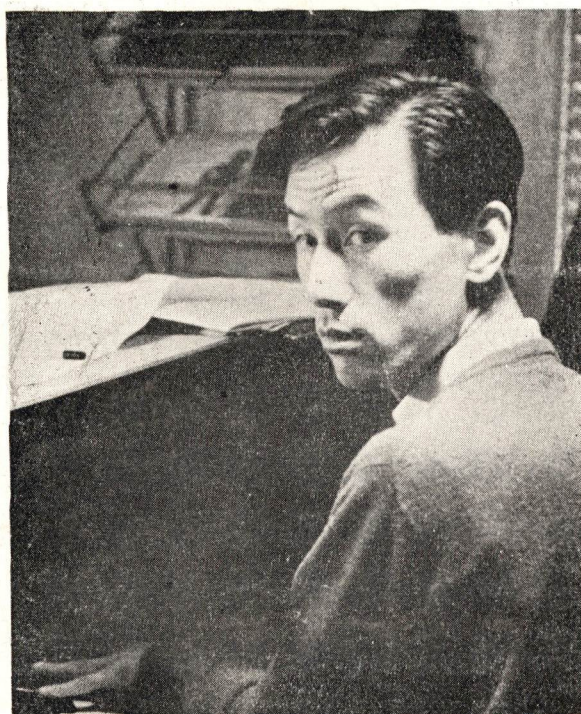


東京労音新交響楽団演奏会

~~~~~ 松山女子高校視聴覚教室 ~~~~~

指揮

芥川也寸志



1962年1月21日(日)午後1時

東松山市 チーゼル 機器体育館

埼玉県立松山女子高等学校

~~~~~



—— 芥川也寸志さんと新響のこと ——

指揮者芥川也寸志さんは文豪芥川竜之介の息子さんで、大正14年東京生れ、昭和15年東京音楽学校卒業、橋本国彦氏、伊福部昭氏に師事、在学中より作品を発表、豊かな才能は多くの注目を浴びました。後、黛敏郎、団伊久磨さん等と「新進作曲家グループ」を作り新しい音楽発展の為に活躍しておられます。

新響は昭和35年東京労音会員の同好の士が集り「東京労音アンサンブル」という名称で発足昭和32年常任指揮者に芥川也寸志氏を迎えて、「東京労音新交響楽団」と改称しました。

以来芥川さんの素晴らしい個性と献身的な指導により今日に至っています。

今回松山女子高校の音楽会に出演、管弦楽演奏と共に芥川さんから氏の音楽に対する溢れるばかりの愛情と新鮮な抱負をおはなして頂きます。(音楽に興味をおもちの方々は一層その鑑賞を深められ、初心の方々にはまた楽しみつゝ音楽の美しさを感じていただけること、と思います)

楽員の真剣な演奏とともに真に感動をよぶ集いになることでしょう。

プ ロ グ ラ ム

- I 楽器解説、各楽器の演奏
- II ラデツキ 行進曲 ヨハン・シュトラウス
- III リズムについて
- IV 交響曲オ八番『未完成』オー楽章 シューベルト
- V 音楽談義 ハーモニーとメロディについて
- VI 交響曲オ五番『新世界より』オ二楽章
オ四楽章 ドヴォルザーク

シューベルト と 未完成交響曲

この曲の作曲者フランツ・シューベルト (1797~1828) は18世紀古典派のおわり頃に生れ、古典派の巨匠ベートーヴェンを心から尊敬していましたが、その作風は形式を重んじた古典派とは全く相違して、感動する心の動きを、そのまま音楽にする。よろこびや、かなしみや、いかりなどがそのまま卒直に表現された音楽を作曲したのです。

ベートーヴェンの死んだ翌1823年31才の若さであたかも巨匠に招かれたかのようになくなりましたが、その稀にみる早熟の天才——17才で歌曲「糸を紡ぐグレートヒエン」を18才で「魔王」「野ばら」を作曲しています——は短い生涯の間に 650にものぼる歌曲を又器楽でも今日演奏される未完成交響曲などの傑作を作りました。彼の多くの名作はロマン派という新しい時代の息吹きを吹きこんだのです。

交響曲第八番「未完成」はシューベルトが25才の時に作曲しましたが、普通交響曲は四つの部分——楽章といふ——からなるのに二つの楽章しか作られてありません。発見され初演されたのは死後37年も経てからのことです。形式の上からは未完成ですが、非常に充実した内容をもっており、シューベルトには、それ以上つづけることが駄足になるような気がしたのかもしれません。

美しいフシとゆたかな和音がロマン的な雰囲気をかもし出していることに注意してお聴き下さい。

新世界交響曲について

皆さんは「家路」というフシで、ドヴォルザーク (1841~1904) を想い出すことでしょう。ロマン派音楽のおわり頃から、それまでの音楽の中心であつた独・仏・伊以外の国々の作曲家達のなかに、自分の国の音楽を作らうとする動きが生れてきました。この音楽上の動きを国民楽派といふ、ドヴォルザークはボヘミア (いまのチェコ) 国民楽派の代表的な作曲家なのです。国民楽派の作曲家達は自国の民謡や舞踊のリズムを土台にして、それぞれの国民の心を音楽にえがき出そうとしたので、ある時は土の匂いのするような郷愁をさそい、ある時は激しさの中に素朴な情味を感じさせるような音楽を作りました。

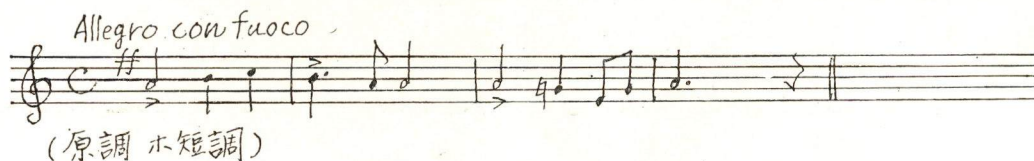
ドヴォルザークは晩年アメリカに招かれ、3年あまりニューヨークの音楽学校の校長をしましたが、その間にこの曲はつくられました。新世界という名の由来はそこから出ていますが、ドヴォルザークの心はアメリカの黒人霊歌のフシと共に故国ボヘミアへの望郷の念も秘められていたかもしれません。

曲は四つの楽章からなっていますが、今日は第二楽章と第四楽章を演奏致します。

第二楽章 ラルゴ —— ごくゆっくりした速度 —— 「家路」のフシがイングリッシュ・ホルンで演奏されます。

第四楽章 アレグロ・コン・フオン —— 熱情をもつて急速に —— 力強く堂々と演奏されます。

下記のフシは第四楽章の大事なフシの一つです。



MEMO

ヤマハ

ピアノ

オルガン



株式会社

谷田楽器店

熊谷市本町 電721